

しまくとぅば教材の作成と実践

発表者 中本 謙¹・山口栄臣²
仲原 穰³・西岡 敏⁴

1. はじめに

沖縄県は、沖縄文化の基層を成す「しまくとぅば」の継承が危機的状況にあることから、2006年3月11日に「しまくとぅばの日に関する条例」（条例第35号）を制定し、その普及、推進に取り組み始めた。条例では細かく規定されていないが「しまくとぅば」とは、概ね「琉球列島で話されている伝統的なことば」を指す。「琉球語」や「琉球諸語」「琉球方言」と同義の用語である。

2009年にユネスコの『世界消滅危機言語地図』に琉球列島の言語が記載されると、さらに保存、継承に向けた動きが活発となる。このような意識の高まりを受けて、沖縄県は、2013年から10年計画で「広げよう！しまくとぅば県民運動」と称し、「「しまくとぅば」普及推進計画」を打ち出している。本ブースで紹介する教材は、このような計画の中で作成されたものである。

2. 副読本『高校生のための「郷土の言葉」～沖縄県（琉球）の方言～』の作成

2014年9月に沖縄県教育委員会から発行され、県内すべての公立高校に無料配布された。編著者は、野原三義・内間直仁・中本謙・田名裕治。本書は、1996年版『高校生のための郷土の文学 古典編』の「I 沖縄の方言」の増補改訂版にあたり、100頁を超える琉球語の副読本は県内初である。琉球語についての専門的な内容を古典学習と関連づけながら学習できるようにも工夫されており、生徒のみならず教師の興味、関心にも応えられるものとなっている。



第一章では、従来の研究および編著者の研究を踏まえ、琉球語（琉球方言）の成立や区画、本土方言との関係についてわかりやすく概説している。また奄美方言、沖縄方言、宮古方言、八重山方言、与那国方言の主な言語的特徴についても、それぞれ概観しており、各地域の母音の数や音韻変化、文法、語彙についての説明がなされている。

第二章では、沖縄県の中心地である那覇の方言の音韻、文法、語彙、表現について詳しく概説している。第三章では、南琉球方言の全体的な特徴を示した上で、宮古佐良浜方言

¹ なかもと けん（琉球大学）

² やまぐち えいしん（沖縄県立具志川高等学校）

³ なかはら じょう（沖縄県立芸術大学）

⁴ にしおか さとし（沖縄国際大学）

を例に音韻、文法、語彙の特徴について述べている。第四章では、表現等の根幹の部分では琉球語の特徴が残されていることもあり、ウチナーヤマトグチ（沖縄大和口）を取り上げ、概説している。琉球語の現状を理解する意味でも重要である。

本書の資料の多くは、編著者の臨地調査によるものであり、編著者の記述的研究が基盤となっている。

第五章の会話編は、日常的な場面を想定して、本島中南部那覇方言、本島北部瀬底方言、宮古佐良浜方言の会話を掲載している。CD付きですべての会話の音声を聞くことができる。

3. 『しまくとぅば読本』の作成

野原三義・加治工真市・西岡敏・中本謙・仲原穰[監修]、「しまくとぅば読本」制作委員会[編]の「しまくとぅば」の「読本」である。対象は沖縄県内の「小学5年生」と「中学2年生」である。地域ごとの伝統的なことばを次世代へ継承することの手段の一つとして作られたのが、この「読本」である。

発行は沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課

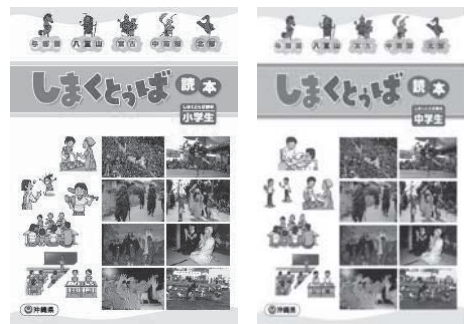
で発行日は2015（平成27）年3月27日である。学習指導要領で「地域」を学ぶカリキュラムが小学校5年と中学校2年に組まれているため、2015年4月から沖縄県内の該当するすべての児童・生徒へ配付している（現在2年目）。

沖縄県内の「5地点」の代表的な方言（沖縄本島中南部【那覇市那覇方言】、沖縄本島北部【名護市久志方言】、宮古島【宮古市平良方言】、石垣島【石垣市四箇方言】、与那国島【祖納方言】）が収載され、会話内容に合わせたイラストや写真が数多く載せられており、親しみやすい作りになっている（この「5地点」はユネスコが2009年に示した「国頭語」「沖縄語」「宮古語」「八重山語」「与那国語」に対応している）。

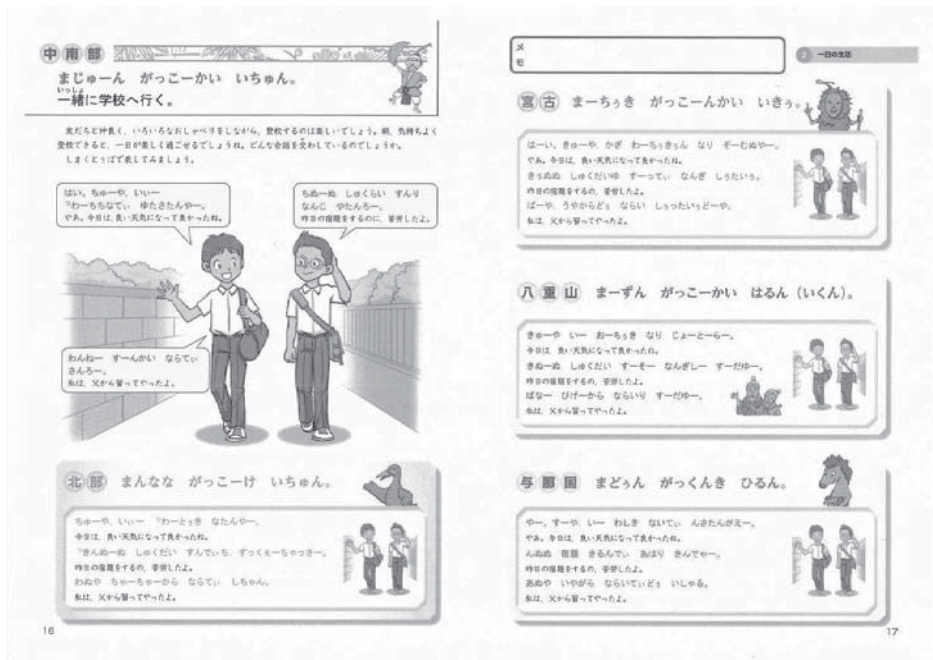
A4版の見開きA3サイズのなかに、上記の5方言が併記され、「しまくとぅば」に触れる機会が少ない児童・生徒たちに多言語を味わうことや、似たことばが多くある一方、全く異なる単語が使用される「多様性」を実感してもらうことができる。また、5地点の一つに注目すると、共通語で示されたフレーズや単語を覚えることで、各方言の「会話集」としての性格も帯びている。

目次を紹介すると「自己紹介、一日の生活、遊び、買い物・外食、観光案内、年中行事、ことわざ・言葉」という内容になっており、身の回りで使える表現から各地域のことについて学ぶことができる。また、小学校5年と中学2年の国語の教科書に掲載されている 椋鳩十「大造じいさんとガン」、太宰治「走れメロス」が各方言で示されており、教科書との接点ができるようにしている。

巻頭には「特別な表記について」がまとめられており、琉球列島の言語の特徴の一つで



ある、音変化が進んだ音声と「表記」について概説している。また、巻末には各方言の「索引」が方言別に五十音順にまとめてあり、「簡易単語集」として利用できる。さらに巻末にはCDが付されており、電子書籍リーダーで起動すると「音声」5方言の話者に吹き込んでもらった音声を聞くことができる。また、本文のPDFも一緒に収められており、授業のなかでさまざまに活用できる。



『しまくとうば読本』（中学生）p.16-17

上に示された「中南部」の例文の下にある「日本語訳」の「一緒に学校へ行く。」を那覇方言では「まじゅーん がっこーかい いちゅん。」といい、場面に応じたイラストにはいくつかの例文がある。これらのすべての例文がそれぞれの方言に翻訳され、左上の記号をクリックすると音声の流れ、イラストを見ながら音声を聞くことでスキットを体得できる。

今回作成した『しまくとうば読本』は、(1)限られた紙面で示すことが可能な5地点の方言を網羅したこと、(2)文字だけでなく、音声で学ぶことができるため、低学年にも有効。(3)電子教科書としての利用や教材との対応、巻末の索引を辞書として活用などの工夫がみられる、など若年層への継承に役立つとともに、多言語学習の楽しさを体得してもらう「読本」である。しかし、沖縄県の意向で「奄美方言」を入れることができなかったこと、短い制作期間のなかで例文の理解を助ける教師用の指導書を作れなかったことなど、いくつかの課題が残されているが今後の課題としたい。

4. 高等学校における「しまくとぅば」の授業実践

沖縄県では戦前・戦後の言語政策によって、方言の使用が制限された歴史がある。そのため、方言のみで会話できる県民が少なくなっている。方言を使用しなくなり、琉球列島の言語の独特な音声変化と中国との冊封関係により、多くの県民は中国語の流れをくむ言語だという認識が根強い。

そこで、私が大学で得た、「しまくとぅば」に対する知識を生徒に還元することで、生徒は郷土の言葉に対する正しい理解を得、さらには郷土の文化を愛する心を育めるのではないかと考え年間指導計画外で実践している。

授業の内容は大まかに3部で構成し、1部「琉球語に関する概説と五母音の三母音化を踏まえた実践」、2部「地域によって変わる音声（授業者による発音）」、3部「新しい方言（ウチナーヤマトゥグチ等）とその成り立ち」を紹介している。

授業後の生徒アンケートによると授業に対する生徒の評価は高く、もっと琉球語について学びたいという意識も芽生えている。さらに、『高校生のための「郷土の言葉」～沖縄県（琉球）の方言～』（野原 2014）が各学校に配布されてからは、那覇方言の会話を活用して会話の練習を取り入れている。

5. しまくとぅば教材のe-ラーニング化

「しまくとぅば」の教育を語学教育の一環として考えるならば、英語などの外国語教育のように、e-ラーニングの手法を採り入れることも必要になってくると考えられる。現在まで蓄積されているしまくとぅば教材をコンテンツとして、パソコン上あるいはウェブ上でも解けるような練習問題を作成し、「しまくとぅば」の学習者に提供できるような仕組みを作ることに取り組んでいる。

今回は、問題作成ソフトである Hot Potatoes を使った沖縄語（沖縄中南部方言）の練習問題について紹介したい。Hot Potatoes は、カナダのヴィクトリア大学で開発されたソフトで、日本語を含む多言語に対応しており、空所補充問題や選択肢問題等を容易に作成することができる。作成した練習問題は、HTML形式に変換することでウェブ上に載せられる教材となる。いつでもどこでも、学習者はウェブ上の練習問題を解くことができ、自動採点によって沖縄語の実力を測ることができる。こうしたe-ラーニング教材は、沖縄語（沖縄中南部方言）のみならず、他の琉球語諸方言（しまくとぅば）への応用も期待できる。

その過程で解決しなければならないこととして、「しまくとぅば」の表記の問題が挙げられる。例えば、「しまくとぅば」の方言語形を仮名（カタカナあるいはひらがな）で入れる空所補充問題の場合（特に「しまくとぅば」独特の発音の場合）、問題作成者の側の方言表記と問題解答者の側の方言表記が一致せず、「正解」であっても「不正解」となってしまう可能性が大いにありうる。沖縄・与那国における喉頭化音や宮古・八重山における中舌母音など、表記法が確立していないものをe-ラーニングの中にどのように組み込むかは大きな課題と言えよう。